

大正7年の天理教青年会発足時に、その会の目的を達成するための実行項目の一つとして、なぜ図書館の設立を掲げたのだろうか。この時期、日本国内では図書館の設立が相次いだ。明治期に創立した図書館は、387館だったが、大正期には、3,244館が創立する。その6割以上に当たる1,966館が、大正14年設立の天理図書館と同時期の大正11年から大正15年に集中して創立されている⁽¹⁾。こうした社会的背景も一因となった可能性はある。しかし、天理教青年会が図書館設立を掲げた背景を考えるうえで、教団内部における学問観の変化に注目する必要がある。

深谷徳郎初代館長は、「青年会の創立以前から、本教に図書館が必要であることは、教内の有識者の間では既に十分に認められており、当然必要であることも認められていた結果だ」と述べている⁽²⁾。しかし、明治期、とりわけ、教祖の御在世当時のおやしきには、学問を修めた人々が多数集っていたわけではなかった。松村吉太郎の明治19年の逸話によると、「多少学問の素養などもあった松村の目には、当時、お屋敷へ寄り集う人々の中に見受けられる無学さや、余りにも粗野な振舞などが、異様に思われ、軽侮の念すら感じていた」という。そうした折、教祖から、「この道は、智恵学問の道やない。来る者に来なと言わん。来ぬ者に、無理に来いと言わんのや。」とのお言葉を承って、「松村は、心の底から高慢のさんげをし、ぢばの理の尊さを、心に深く感銘した」とある⁽³⁾。

この逸話は、松村を通して人間の高慢心を戒められたものであるが、明治20年に教祖が姿を隠した後もしばらくの間は、学問を排斥する風潮があった⁽⁴⁾。そうした風潮が、少しずつ変化する。天理教は、教派神道の一派である神道本局に属していたものの、明治政府の方針とは合わない教えを説いていたので、政府から弾圧を受けていた。とりわけ、明治29(1896)年には内務省訓令によって、激しく弾圧をされることになり、世間からもいわれの無い誹謗中傷が続く。そうした中、独立した宗教団体としての公認を得るために、明治32年には天理教校、続いて、明治41年には天理中学校という教育機関を設置する。また、大正期になると東京の大学で学ぶ教内の学生も現れ、大正4年には、天理教本部青年会が「将来おぢばに図書館を設立する準備に着手中」であり、「寄贈図書歓迎」を呼びかけている⁽⁵⁾。大正5年以降になると、東京大学をはじめとする大学で学問をおさめた若い人たちが教団本部に帰ってくる。大正6年に本部青年会顧問に就任した松村吉太郎は、彼らに対して、「誠と信念を以て主とし、学問智識を以て従とせねばならぬ」と戒めた上で、「今日の状態に鑑みれば、決して学問智識を閑却することならぬ。誠と信念を以て天啓の教を信受して、これを活用するには、学問智識も大いにその必要がある⁽⁶⁾」と説いている。こうした動きの中で、図書館設立の構想は、大正7年の青年会規程において、青年会の目的を達成するための正式な実行項目として明文化された。

その図書館は、大正14(1925)年に海外布教を目指す人材を養成することを目的として創立した天理外国語学校(現天理大学)の中に「天理図書館」という名称で実現する。その後、地域社会の人達にも公開する図書館を新たに建築することにな

る。これが、本館(現在の西館)である。本館の建築は、公開図書館によって社会貢献を果たすという理念が結実したもので、その後も公開図書館であり続けることによってその理念を象徴する建物となっている。

本館の建築は、昭和3(1928)年5月30日、創設者中山正善天理教2代真柱が、きりしたん研究で知られる恩師の姉崎正治に相談するところから始まる。この計画に関して、2代真柱が姉崎に対して率直に物を言える信頼関係があったことを表す逸話が残っている。当時、姉崎は新築した東京大学図書館の館長だったが、その図書館について数多くの不満を漏らしていた。まだ学生だった2代真柱が東大の問題点をできるだけ改めて図書館をつくりたい、と持ちかけたところ、姉崎は「俺の図書館には欠点は一つもない」と答えたという⁽⁷⁾。

実際には、姉崎の助言でミネソタ州立大学図書館の建築プランの一つを元にして、京都帝国大学付属図書館長の新村出や東京帝国大学工学博士内田祥三の意見を聞くなど何度も改訂をしながら、最終的には、内田の紹介により京都帝国大学工学部坂静夫に設計を依頼し、昭和4年から工事が始まり、翌5年に竣工した。

外観を概略すると、地階部分の外壁には黄竜山石、1階と2階にはスクラッチタイルを使用している。2階の窓は半円アーチを用いたロマネスク風の意匠、正面玄関の階段にはフランク・ロイド風の花鉢が取り付けられている。内装には、講堂の椅子、閲覧室の机、ホールのシャンデリア、大理石のカウンターといった調度品がある。これらのものは今でも使用している。こうした例は、現役の図書館としては稀有であり、文化的価値を高く評価されている。

ところで、シャンデリア、大理石のカウンター、壁の飾り付けの意匠などの内装は、意図的に豪華にしたわけではない。むしろ、2代真柱は、「余計な所へ不必要に手が込んで華美に過ぎると思われる欠点もないではない」と述べている⁽⁸⁾。豪華な内装になったのは、契約締結後の物価下落により、当初の契約額のまま工事が進められたためである。物価の高かったときのままで支払いをすることを決めたため、工事業者の仕事が契約外のことも施工するほど丁寧になり、豪華な仕上がりになったのである。

建物について述べてきたが、2代真柱が考えていた図書館の中身つまり蔵書はどのようなものだったのだろうか。

[註]

- (1) 文部省社会教育局『全国図書館二関スル調査—昭和11年4月現在』、3頁。
- (2) 深谷徳郎「天理図書館の経過と将来の方針」『道乃友』大正15年12月5日号。
- (3) 『稿本天理教教祖伝逸話篇』190「この道は」。
- (4) 堀越儀郎「文書伝道の教外的価値」『道乃友』大正14年2月5日号。
- (5) 『道乃友』大正4年8月号、87頁。
- (6) 天理教青年会本部『天理教青年会史』第2巻(1975年)、313～317頁。
- (7) 「創立の日をかえりみて」『ビブリア』第18号、6頁。
- (8) 「天理図書館二十五周年の回顧と将来を語る」『ビブリア』第5号、8頁。